

会話の進行における「はい」の機能について

— 韻律的特徴との関りから —

甲斐 朋子 (大阪大学)

1. はじめに

人々が日々行う社会的行為の中で多様な使われ方をする日本語の1つに、「はい」ということばがある。「はい」の用法は、質問や依頼などに対する肯定応答だけでなく、あいづちや名前を呼ばれたときの返事、「はい！チーズ！」などのかけ声と数多い。本研究では、このように様々な用法をもつ「はい」の機能のうち、会話の進行に寄与する機能を「はい」の現れる位置によるものと音声面によるものに分け、両者の関係を明示する。

甲斐(2016; 2019a)では、電話会話データにおいて、進行中の話題が終了に向かい、別の話題へ移行する箇所に見える「はい」について分析を行った。具体的には、電話のかけ手である発話者(C)が電話の受け手である発話者(R)の発話に対して発した「そうですか」が発話連鎖の第1発話部となり、受け手(R)の「はい」が第2発話部として続き、続くかけ手(C)の「はい」が第3発話部として連鎖の最後に現れるというターン構成に着目した。これらの一続きの発話の連なりは、Schegloff(2007)による「発話連鎖を終了に向かわせるのに特化した発話連鎖」として機能していた。そして、電話の受け手(R)の発話の不在や、両話者の発話に重複が発生した事例も、この一連の発話連鎖のターン構成が元になっていることを明示した。(これらの3つのターン構成を「はい」の出現パターンとよぶ)。この3つの「はい」の出現パターンはいずれも進行中の話題の発話連鎖を終了に向かわせることが可能となっていた。そして、このターン構成の最後の位置に現れる「はい」がこの出現位置によって、「ひとまとまりの話題の区切れ」を示すという働きを担っていることについて論じた。また、甲斐(2019a; 2019b)では、「はい」の出現パターンとその後が続く発話について音響分析を行い、会話の進行と「はい」の韻律的特徴について考察を加えた。具体的には、3つの「はい」の出現パターの第3発話部に位置する「はい」は、出現位置にともなう役割の他に、韻律的な特徴によって会話進行上、次のような役割を担っていることが推察された。a. 進行中の話題が終了に向かうことへの承認、b. 新たな話題の開始の指向、c. 進行中の話題を含む目的行為の継続の指向である。bとcの韻律的特徴については、Couper-Kuhlen(2004)などでもすでに指摘されている。しかし、aの進行中の話題が終了に向かうことへの承認の発話の韻律的特徴については、十分に明らかにされたとは言えない。そこで、本研究では、進行中の話題が終了に向かう一連の発話連鎖の中で、同じターン構成の第3発話部に現れ、承認として機能している「はい」に着目し、進行中の話題が終了に向かう、または継感していると感じられる場合の「はい」の韻律的特徴はどのようなものかについて聴取実験を用いて検証する。

2. 「はい」の出現パターンと韻律的特徴

2.1 同一ターン構成における3つの「はい」の出現パターン

甲斐(2016; 2019a)で分析対象とした電話会話(18組、合計約41分)の中で観察された「はい」(かけ手81, 受け手: 366)の特徴として、受け手の「はい」はあいづちや、相手の

の先行発話(隣接対の第1発話部)への応答(隣接対の第2発話部)としての使用が多いのに対し、かけ手の「はい」では先行発話を持たない「はい」が多く観察された。本研究ではそれらのうち、「はい」の後に新たな話題が続くものに着目した。この「はい」は、いずれも進行中の話題から次の話題へと移行する場所に見られ、「そうですか/そうなんですか」に始まる進行中の発話連鎖を終了に向かわせるのに特化した発話連鎖(図1)の第3発話部に位置するものであった。この「はい」の出現の仕方は、図1のパターンを基本(=パターンA)とし、そこからの派生的な使用としてパターンB、パターンCが観察されたが、いずれのパターンにおいても会話参加者が協働で話題終了作業を達成することが参加者間で共有されていた。表1に甲斐(2016; 2019a)で観察された「そうですか」に始まる3つの「はい」の出現パターンを示す。



図1 進行中の発話連鎖を終了に向かわせるのに特化した発話連鎖
C = 電話のかけ手, R = 電話の受け手

3. 聴取実験

3.1 分析課題

2.1で述べた「はい」の出現パターンに着目し、会話の進行に対する音声面での「はい」の機能を調査する。分析課題は次の2点である。表1の出現パターンAからCの【第3発話部】の「はい」(以後、③C1~C3:「はい」)を原音声の「はい」と異なる韻律的特徴の「はい」と入れ替えたときに、「はい」の種類によって、(1)③C1~C3:「はい」までの時点で、進行中の話題に対する終了感/継続感¹は変わるか。(2)④C1~C3:「じゃー/あの一」までを聞いた時点で、進行中の話題に対する終了感/継続感¹は、(1)の場合と比べて変化するかである。

表1 3つの「はい」の出現パターン

	「はい」出現パターンA C1:電話のかけ手, R1:受け手	「はい」出現パターンB C2:電話のかけ手, R2:受け手	「はい」出現パターンC C3:電話のかけ手, R3:受け手
	進行中の話題 ↓	進行中の話題 ↓	進行中の話題 ↓
【第1発話部】	① C1: そうですか	① C2: そうですか	① C3: そう[です]か
【第2発話部】	② R1: はい	② R2: ()	② R3: [はい]
【第3発話部】	③ C1: はい	③ C2: はい	③ C3: はい
	④ C1: じゃー + 別の話題	④ C2: あの一 + 別の話題	④ C3: あの一 + 別の話題

3.2 分析対象音声

2015年2月に筆者が収録した調査依頼の際の電話会話(全18会話)の中で、先述の進行中の話題が終了に向かう一連の発話連鎖が観察された5つの会話の中から、原音声「はいa」, 「はいb」, 「はいc」のF0値をもとに音形(F0曲線のパターン)と高さレベルを操作し、原音声と合成音声、合計18種類の「はい」を作成した。合成音声の作成にはPraat¹を用いた。音形は下がる[はい]型と下らない[はい]型の2種類を対象とした。図2に18種類の「はい」の音声特徴を示す。

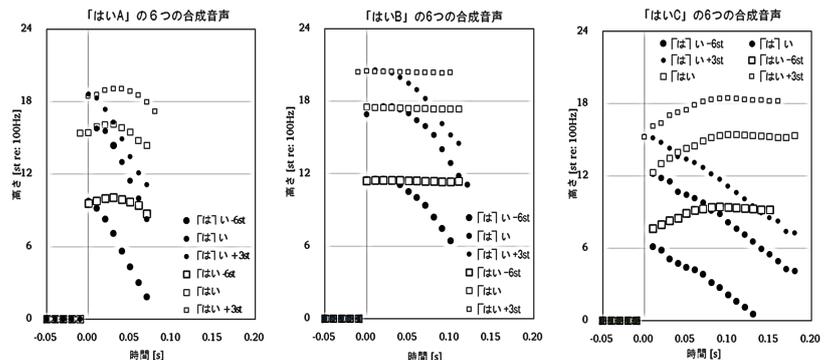


図2 「はい」の18種類の合成音声:

(左)「はいa」群_6音, (中央)「はいb」群_6音, (右)「はいc」群_6音

3.3 実験方法

日本語を母語とする近畿圏在住の某大学の大学生(2年生から4年生)30名に、3つの「はい」の出現パターンの「はい」の位置に18種類の韻律的特徴の異なる「はい」を挿入した電話会話を提示した。具体的には、出現パターンAからCの③C1~C3:「はい」までの会話をそれぞれ18種類の「はい」に入れ替えた3種類の会話枠と、この3種類の会話枠にそれぞれ後続する「あの一/じゃー」を加えた会話枠の合計6セットを提示した。聴取者は提示された状況の会話について、進行中の話題が終わったように聞こえるか(終了感)、または、終わっていないように聞こえるか(継続感)を二者選択の形式で判断した。各種類の会話音声はCDによって提示され、18種類の「はい」の出現はすべての会話でランダムな順で提示された。1回の質問につき、一定の間をおいて同じ会話音声を2度提示する方法を取った。

3.4 聴取実験の結果と考察

表1の出現パターンAからCの③C1~C3の位置にある「はい」に18種類の韻律的特徴をもつ「はい」を挿入した際の2つの分析課題の結果を示す。進行中の話題に対する終了/継続の判断率を音形別、高さレベル別にまとめたものを図3から図5に示す。分析課題(1):表1の③C1~C3:「はい」までの時点で、進行中の話題に対する終了感/継続感¹は変わるか。全体的な傾向として、3つの傾向が観察された。1つは[はい]型は終了感が生じやすいが、[はい]型は、終了感、継続感の想起に関係しているものは多いとは言えない(図3)。次に、「はい」の

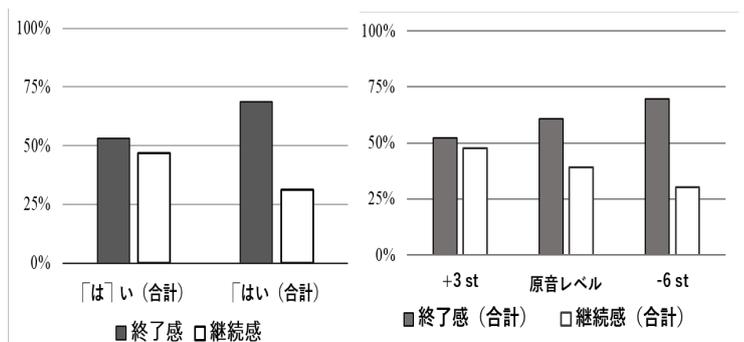


図3 「はい」の音形別:「進行中の話題」に対する終了/継続の判断率

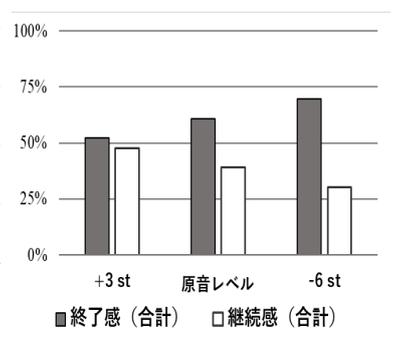


図4 「はい」の高さレベル別:「進行中の話題」に対する終了/継続の判断率

¹ Praat : Praat version 5.3.63を使用。 www.praat.org

高さレベルでは、高くない音、特に低い音は終了感を生じやすいが、高い音は終了/継続の判断に関係していないものが多い(図4, 図5)。最後に、継続感を確実に生じさせる韻律的特徴は本研究の実験の範囲では該当がないことを示している(図5)。分析課題(2):④C1~C3:「じゃー/あの一」までを聞いた時点で、進行中の話題に対する終了感/継続感^④は、(1)の場合と比べて変化するか。図6から図8に会話枠AからCの当該の「はい」までの会話を聞いたときに進行中の話題が終了と判断された割合と、会話枠A'からC'の「じゃー/あの一」までを聞いたときに進行中の話題が終了と判断された割合を示す。黒丸は「はい」型を示し、白い四角は「はい」型を示している。黒丸、白い四角の大きさは、大きいものから順に、音の高さレベルの高いものを示している。図の縦軸に会話枠A', B', C'(④C「じゃー/あの一」まで)を聴取したときの判断率を示し、横軸には会話枠A, B, C(③C「はい」まで)を聴取したときの判断率を示す。

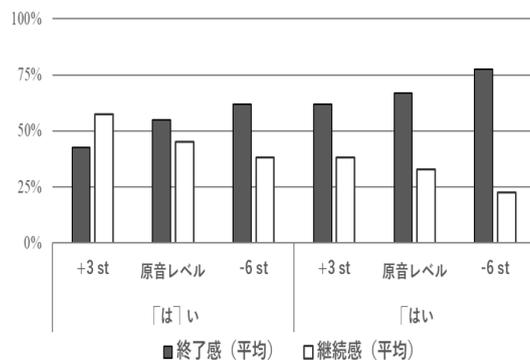


図5 「はい」の音型/高さレベル別: 「進行中の話題に対する終了/継続の判断率

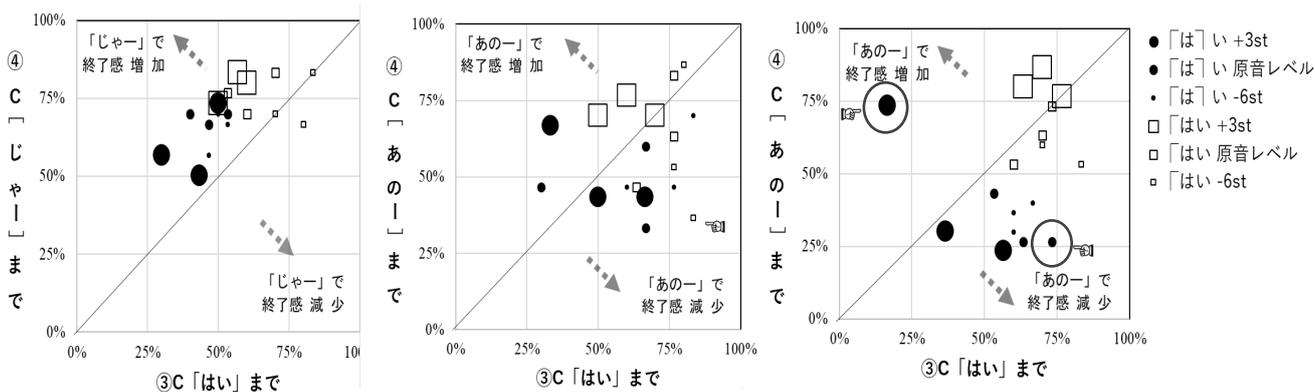


図6(左) 会話枠A/A', 図7(中央) 会話枠B/B', 図8(右) 会話枠C/C' :

第3発話の③C「はい」までと後続発話④C「じゃー」/「あの一」までの場合の進行中の話題終了との判断率

会話枠A/A' の聞き取り結果: 「はい」の種類による「はい」までの進行中の話題に対する終了感の回答傾向と、「じゃー」まで聞いた時の回答傾向に統計的に有意な差は見られなかった²。ただし、図6の聞き取り結果の散布図を見ると、「はい」の種類を表す●や□の凡例記号が図表の縦軸と横軸の間の中心線よりも多少左側にずれた状態で布置されている。このことは、「はい」までの会話音声聞いたとき、「はい」に続く「じゃー」まで聞いたときとは、「はい」型、「はい」型ともに、「じゃー」まで聞いたときの方が、進行中の話題が終了したと判断された割合が高くなったものが多いことを示している。そして、それは特に「はい」型に顕著に見られる。「はい」までの進行中の話題に対する終了感と、「じゃー」まで聞いた時の終了感の判断率について相関関係は $r=0.57$ で、両者には中程度の相関がある。

会話枠B/B' の聞き取り結果: 「はい」の種類による「はい」までの進行中の話題の終了感の回答傾向と、「あの一」まで聞いた時の回答傾向に統計的に有意な差は見られなかった³。ただし、図7の●と□の散布の状態が示すように、「あの一」まで聞いたときの方が、終了感が減少している「はい」が多いことが特徴としてあげられる。

会話枠C/C' の聞き取り結果: 「はい」までの進行中の話題の終了感の回答傾向と、「あの一」まで聞いた時の回答傾向に「はい」の種類による差が見られた⁴。どの種類の「はい」を含む会話の判断率がこの有意性に寄与しているかを調べるため、残差分析を行った。結果、2つの要因が示された。1つは、「はいb」の原音より3st高い「はい」において、③C:「はい」まで聞いた時の終了感が有意に少なく、④C:「はい」の後の「あの一」まで聞いた時の終了感が有意に多いこと(図8の左上側にある指印のついた丸枠内の大きな●)。もう1つは、「はいa」の原音レベルの「はい」において、③C:「はい」まで聞いた時の終了感が有意に多く、「はい」の後の「あの一」まで聞いた時の終了感が有意に少ないこと(図8の右下側にある指印のついた丸枠内の中程度の●)である。このように図8から、④C:「あの一」の有無によって、進行中の話題の終了感に対して顕著な違いを示す「はい」に加え、「はい」型と「はい」型が「あの一」の有無によって、異なるふるまいを

² カイ二乗検定の結果、 $\chi^2(17)=6.182, p=0.992$ となり、両者に有意差は見られなかった。(有意水準 $p=0.05$)

³ カイ二乗検定の結果、 $\chi^2(17)=20.027, p=0.273$ となり、両者に有意差は見られなかった。(有意水準 $p=0.05$)

⁴ カイ二乗検定の結果、 $\chi^2(17)=32.042, p=0.015$ で、両者の間に有意差が見られた。(有意水準 $p=0.05$)

見せていることがわかる。これは、「はい」型は「あの一」の有無に関わらず、進行中の話題への終了感が高いものが多いのに対し、「はい」型は「あの一」を聞くことで、進行中の話題への終了感が減少するものが多いことを示している。

以上を踏まえ、全体として言えることは、③C:「はい」までと④C:「じゃー/あの一」までを聞いた時の進行中の話題の終了感の判断率は会話枠によって異なる傾向にあること、それは特に「はい」型に著しいと見られる。つまり、「はい」型は話題の終了/継続との関係に関して中立的であるということもここでも示していると言える。

このような「はい」自体の韻律的特徴にともなう会話進行への働きかけが認められる一方で、「はい」の出現する環境、ここでは会話枠内の他の発話が進行中の話題に対してどのような役割を担っているかということも進行中の話題の終了感、継続感に寄与していることが窺えた。この点について会話枠によって進行中の話題に対する終了感/継続感に違いが生じる理由を考えてみたい。

まず、会話枠A/A'では、電話のかけ手の③C:「はい」のあと、同じ話者の④C:「じゃー」という発話が続いている。「じゃー」ということばは先行内容を踏まえて次の話題に移る際に使われる。そのため、「はい」までの時点よりも、「じゃー」を聞いた後の方が進行中の話題の終了感が増加したと考えられる。また、この「じゃー」の発話の韻律的特徴がためらいの際に見られる勾配のなだらかな発話ではなく、十分な勢いと高低差(6st)のある下降調で発せられたことも、進行中の話題から次の話題へと移ることへの合図となり、進行中の話題が終了したと判断された一因と推測される。次に会話枠B/B'と会話枠C/C'については、「はい」までの時点と比べ、「あの一」が続いた場合の方が、進行中の話題は「終わっていない」という判断が増えている。その理由として、「あの一」ということばが何か続きのことばが見つからないときに、つなぎのことばとしても使われることから、進行中の話題に関して引き続き何か話が続くかと判断された回答が多くなったと考えられる。一方、会話枠B/B'と会話枠C/C'の違いとして、両会話枠の①C:「そうですか」の前に先行発話「あ」があり、会話枠B/B'の「あ」に比べ、会話枠C/C'の「あ」の長さが約4倍長くなっていた。この「あ一」が進行中の話題に対して、話者が十分に納得していないことを伝えているように聞こえることがあげられる。また、③C:「はい」の前の吸気が会話枠B/B'に比べ、会話枠C/C'は2倍近く長いことと、吸気の際の音が顕著であること。このような韻律的特徴が、話者のことば探しの合図として機能していることが考えられる。以上のことから、上述のような会話枠内の発話の(ことばの)意味や、出現のタイミング、発話に伴う韻律的な特徴、発話と発話の間に現れる吸気の仕方の違いによっても、終了感に対する判断率に差が生じたと推察される。

4. まとめ

今回の聴取実験により、「発話連鎖を終了に向かわせるのに特化した発話連鎖」という同じターン構成の位置に現れる「はい」について、出現位置は「ひとまとまりの話題の区切れ」を示しているが、「はい」の韻律的特徴が異なる場合、進行中の話題が終了したと判断されやすいものと、終了と継続に対し中立的なものがあることがわかった。このことは、「はい」ということばが、出現位置という会話の構造面では、進行中の話題への区切れを示すのに使われる一方で、進行中の話題が終了に向かうことへの発話者の態度を韻律的な特徴によって提示していると考えられる。本研究の限界として、本研究で明らかになった「はい」の韻律的特徴は、「はい」のもつ多様な音声的特徴の一部を調査したものであること、また、「はい」と同じ会話枠に現れる他の発話の出現位置、および韻律的特徴のもつ機能について体系的な分析が行われる必要があることがあげられる。今後の課題として、進行中の話題が終わりに向かう際に現れる「はい」以外の談話標識として機能することばについても、それらの韻律的特徴が伝える発話者の態度と会話の進行との関係について明らかにされることが望まれる。

参考文献

- Couper-Kuhlen, E. (2004). Prosody and sequence organization in English conversation. *Sound patterns in interaction*, Couper-Kuhlen, E.・Ford, C. E. (Eds) JohnBenjamins Publishing pp.335-376.
- 甲斐朋子(2016). 隣接対の第1発話部を持たない「はい」の使用について—「そうですか」で始まる話題終了に向けたターン構成から見た場合— 言語科学会第18回年次国際大会予稿集, 62-65.
- 甲斐朋子(2019a). 日本語の「はい」の表すもの—「はい」の機能と韻律的特徴をめぐって— (博士論文, 大阪大学)
- 甲斐朋子(2019b). 進行中の話題の終了可能地点に現れる「はい」—機能と韻律的特徴との関係について— 言語文化共同研究プロジェクト2018: 音声言語の研究, 13, 1-16.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis I* (Vol.1). Cambridge University Press.